

月刊

いっしょのとも

第八卷

一月号

若い人の自己執着

若い人に
素直さが
無くなって
自己への執着が
増大している
そして
自己に閉じ
互いに
孤立している

花は競わない

人は
競う
でも
花は
その美を
競わない

あたまの活性化

あたまは
時間の関数で
老化し
使用頻度の関数で
活性化する

人生を考え直して

みたい人は(三七)

『聖書』解説(一三)

マタイ福音書の第五章を続けます。

二七 『姦淫してはならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。

二八 しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。

二九 もし、右の目が、あなたをつまづかせるなら、えぐり出して、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに投げ込まれるよりはよいからです。

三〇 もし、右の手があなたをつまづかせるなら、切って、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに落ちるよりはよいからです。

三一 また、『だれでも、妻を離別する者は、妻に離縁状を与えよ。』と言われています。

三二 しかし、わたしはあなたがたに言います。だれ

であっても、不貞以外の理由で妻を離別する者は、妻に姦淫を犯させるのです。また、だれでも、別離された女と結婚すれば、姦淫を犯すのです。

ここでは、男女関係のあり方が説かれています。もつと言いますと、結婚のあり方、性的交渉のあり方、さらには家庭のあり方が説かれているように思われます。

キリストの生きた時代・地域の男女関係は、男中心の社会で、女は男の附属物のように扱われ、一夫多妻制が是認されていました。

しかし、これらのキリストの言葉は、男が女を性欲満足の手段として見ることを禁じ、また、離婚を原則として禁じるものになっています。したがって、それによって一夫一婦制を説いていると言えます。

ですから、これらの言葉は当時の社会にとって画期的なことだったと言えるのです。

また、他方、これらの言葉は、先月号で述べましたように、私のモデルで言いますと、人格(たてまえ)の働きとしての律法に従うことを越えて、こころのあり方の大切さを説いている、という点にも注意しなければなりません。律法では「姦淫してはならない」であり、「だれでも、妻を離別する者は、妻に離縁状を与えよ」であ

ったわけですが、それを、こころの問題としたわけです。つまり、姦淫に至るこころのあり方を問題とし、離別に至ったときのこころのあり方を問題としているのです。

姦淫を実行するに至るには、女の人へいまでは男の人にも問題になると思いますが、色情・情欲の目でみるこころにその原因があるのですから、その原因を除かなければ、真にこの、仏教で言えば不邪淫戒に当たる「姦淫してはならない」を克服したとは言えないからです。

また、離縁状を与えて妻を離別するに至れば、妻は再婚することで姦淫を犯しますし、またその相手にも姦淫を犯させることになり、結婚制度が乱れて行きます。そうなりますと、先の「姦淫してはならない」という律法のこころからの克服も無きものになってしまうからです。

このように、律法を真に守るにはこころが大切なのですが、しかし、先月号でも述べましたように、こころが大切なことはその通りなのですが、こころで「女（男）を色情の目で見ないようにしよう」としても、実は、できるものではないのです。そこが、人間の難儀なところなのです。こころのところが、キリスト教者には理解できないように思われます。

ですから、「情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです」という文章そのものの解釈

だけがとても重要になってくるのです。

例えば、情欲をいだくとはどういうことなのか、女を見るというときの女とは具体的には誰のことなのか、心の中で姦淫を犯すとはどういうことなのか、といったところがとても重要になってくるのです。また、そもそも情欲をいだかないで、女を見ることが出来る人が果たしているのか、いないに決まっているから、この言葉は、人に自分の罪深さを教えるために存在するに違いない、といった具合です。ですから、自分の力でこの教えを守ることは不可能なので、ただ、神を信じることによって得られる神の愛によって、あるいは聖霊の力によって浄化されて可能になるのだといったことになります。

いちいち、誰が、どんな解釈をしているかといったことは、私にとってはどうでもよいことですので、省略します。関心のある方は、とても多くの解説書が発刊されていますので、それらをご参照ください。

この文章は、キリスト者の結婚観に大きな影響を与え、いまだに離婚を許さないキリスト教宗派（国や民族）があるようです。ですから、この解釈はとても重要なものでもあると言えます。

以下、私の考えを述べてみます。これは、キリストの教えに添ったものと、私は考えています。

既に述べましたように、仏教でも、五戒の一つに不邪淫戒というのがあります。ご承知の通り、それはよこしまな男女関係を禁ずるものです。では、よこしまな男女関係とは何なのか、それが問題だと言えます。

三歳の子なら知っていますように、この世は、男と女から成り立っています。原則として、自分の都合で勝手に、男になったり女になったりすることはできません。それは、神や仏から授かったものです。ですから、当然男には男の役割、女には女の役割があるように思われま

す。私は、その役割を果たすことが、この世を良くしていく道だと考えます。

では、女としての役割とは何なのでしょいか。一番大きな役割は子どもを産み、育てることだと思われま

す。勿論、男も子育てには参加しますが、主になるのは女のように思えます。では、男の役割は、どこにあるのでしょいか。男は女よりも体力に勝りますから、男の役割は体力が要求されるところで、それを活かして働くことだと思われま

す。この男女の役割に価値の上下や貴賤はありません。基本的には二人で力を合わせて家庭を作っていくことだと言えます。

では、家庭全体の役割はどこにあるのでしょいか。昔は、家庭は生産と消費の場であり、家族団欒の場であっ

て、そこで子どもの社会化（教育）も行われました。人間が生きていく基本的な役割を果たしていたと言えます。ところが、今では、生産は、農林水産業や商業など一部を除いて、大多数は家庭から分離しています。また、教育も学校や学習塾が受け持つようになっていきますし、子どもの躰けすらも、おけいこ塾にまかされるようになっていきます。さらに、かつては消費単位としての家庭には原則として「財布」は一つで、家計と呼ばれましたが、今は、一人一人が「財布」を持つ「個計」へと変わってきています。お祖父さんも、お祖母さんも、お父さんも、お母さんも、みんなそれぞれの財布をもっています。ですから、家族がそれぞれ好きなものを買います。車、着る物、テレビ・ビデオなどの電気製品から食べ物に至るまでです。ですから、一家団欒もなくなりつつあります。消費単位としての家庭も殆ど崩壊しています。

ここで話題としていきます、性の問題も、乱れに乱れて、フリーセックスの時代に至っています。かつて、近松物語という、手代が主人の女房と駆け落ちし、捕まって、市中引回しの上、獄門磔の刑になるという話の映画がありました。が、いまでは、刑法にはふれません。日常茶飯事に起きることで、もはや新聞種にもなりません。

もともと、家庭は夫婦間で性的欲望を満足させる場であ

もあつたと思いますが、いまでは、そうとばかりはいえなくなっています。好きであれば、そうした社会関係を離れて自由にセックスを楽しむことが、個人の権利のよ
うに考えられているのではないのでしょうか。アメリカでは、男同士、女同士の結婚すらが、許されています。日本でも、こうした自由な性の風潮は、若い人たちに特に強いようです。

では、家庭に残る役割は、どこにあるのでしょうか。私は、それは、お互いの人間的成長にあるように思っています。それは、お互いが善い人間になって、自分を無にしても、相手を幸福にしてあげようとして努力・精進するということです。例えば、母は、自らをかえりみず、子を産み、育てることで、神や仏の愛を自分と子と家庭に育てます。父も子育てにおいては同等です。

そういう覚悟をもって、みんなが結婚するべきだと思うのです。実は、そうすることが、誰でもが幸せになる道なのです。でも、現実はこちらからはるかに遠くにあります。キリストの説いた教えから程遠くなっています。

前述の通り、キリストの真意は、女性の社会的地位の向上とこのころの大切さにあつたと思います。離婚することは善いことではありませんが、教法的に禁止することも行き過ぎだと思えます。キリストの言葉は、仏教で

言えば、方便です。金科玉条にすべきものではありません。その証拠に、キリスト者の間では、キリストのころではなくて、言葉の解釈がとて重要になっています。でも、言葉に執らわれてはなりません。臨機応変に受け取るべきものなのです。私から見ますと、キリスト者の限界は、キリストの境地を理解しないところにあります。従って、聖書の文言に執らわれ過ぎるのです。

姦淫が悪いことは言うまでもありません。そして、それは、前にも述べましたように「姦淫しないでおう」「情欲をいだいて見ないでおう」と思つてできるものではないのです。なのにしなければならぬのです。このギャップが理解できないため、キリスト者は、そうできなくてもよいのだと、いろいろ理屈をつけて自己満足しています。でも、どんな理屈をつけても逃れることはできません。やっぱり、行き着くところは、欲情をいだいて異性を見てはならないのです。もし見れば、既に、姦淫していると思わなければならないのです。

でも、それは、意識してできることはありません。日々、修行してそうなるうと思つていけば、自然にそうなるものなのです。

少し触れましたが、離婚問題について、もう少しだけ述べておきます。私も、勿論、離婚はしない方がよいと

思っています。でも、夫婦には様々な事態があり得ますから、「不貞以外の理由で」も、離婚しても仕方がないという場合もあると思います。

少なくとも親は子どもの成長には自己犠牲を払っても、責任をもつべきだと思いますが、でも、離婚が許される場合として、例えば、夫婦一緒にいることが、子どもを含めて家族成員相互の人的成長（人格形成）にプラスに働かない、もつと言いますと、逆に、マイナスに働くような場合には、そして、別れることでそれが解消できる場合には、離婚もやむを得ないように思えます。私は、仏教の不邪淫戒でいう「よこしまな男女関係を」を次のように考えます。

それは、法律的に結婚しているかどうか、あるいは一時的なものかどうかには関わりなく、複数の人と同時・並行的に性的交渉をもつてはならないと、教えているのだと解釈しています。

最後に、まだ解説していない、自分をつまずかせる目や手を切り取って捨てる、という部分ですが、これは、それほど真剣に性の問題を考えるべきである、ということとを教えています。でも、私は、性的関係を持ちたいと思う気持ちがあくなくなければ、美人や美男子を見て、きれいだと思うのは、問題にならないと思っています。

自作詩短歌等選

日本人に欠けたもの

丸山真男が
死の少し前に
曰く
今
日本に欠けたものは
他者感覚だ
と

それは
同氏が擁護する
民主主義の
行き着く先
なのに

暴力に暴力で

暴力に
暴力もちて
対抗す
世界の人も
日本の人も

飲む打つ買う

自らの
こころの支え
うるために
飲む打つ買うの
どれかにたよる

福德みちる

法句経（一一二二）

その報い

私に來ないと

思いなし

善を軽んず

べからざる

水も滴り

落ちるなら

水瓶さえも

満たされる

ころある人

少しずつ

滴る水を

集める如

善を積み積み

生きるなら

やがて福德

満ちあふれてくる

他人が悪い

人間は

思いどおり

行かないとき

自分が悪いのに

人をうらむ

自分の人権を

主張して

人を裁く

哲学書の執らわれ

哲学書

読むたびごとに

感じるは

どれも執らわれ

持てる悲しさ

信じる・愛する

現代人は

自分を信じても

人を

信じることができない

自分を愛しても

人を

愛することができない

善きことをなせ

法句経（一一一八）

人もしも

善きことなせば

繰り返せ

善きことせんと

心せよ

善きこと積むは

楽しみなりぞ

善が熟するとき

法句経（一一二一）

まだ善の

報い熟さぬ

間なら

善人さえも

わざわいに

遇うことさえも

あるけれど

善の果報が

熟すとき

善人こそが

幸福に遇う

釈尊のごとば（五三）

法句経解説

（一八五）罵（ののし）らず、害（そこな）わず、戒律に關しておのれを守り、食事に關して（適当な）量を知り、淋しいところにひとり臥（ふ）し、座し、心に關することにつとめはげむ。これがもろもろのブツダの教えである。

先月号の（一八三）で七仏通戒偈と呼ばれる偈が出てきました。それは、悪いことをせず、善いことをなし、心を淨めること、それがもろもろのブツダの教えである、というものでした。

この偈でも、最後の締めくくりは同様です。ですから、七仏通戒偈の一つと考えてもよいということです。これは、先月号の（一八三）をもっと具体化したものだと言えます。

まず、はじめの「罵らず、害わず」という部分は、对人的な側面、私のモデルで言いますと「他己」に關することです。他者に対して、たとえ不快なことがあっても、声を高くして非難したり、害を与えたりしないことを言っています。そうすることは、実は、前の偈の善惡で言

いますと、惡をなしていることになると思います。

次の「戒律に關しておのれを守り、食事に關して（適当な）量を知り、淋しいところにひとり臥し、座し、心に關することにつとめはげむ」ことは、自己に關することです。

先ず、「戒律に關しておのれを守る」のは、六波羅蜜で言いますと、「持戒」ということになりました。誰でもが守るべき戒律として五戒が、よく知られています。それは、不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒です。現代でも、これらの戒律のほとんどが、守られています。それは、オウム真理教がしたことを思い出して頂ければすぐお分かりになることだと思えます。オウム真理教は、例外的なケースだとお考えかも知れませんが、それは、それは決してそうではなく、現代人の典型例だ、と考えています。

次に、「食事に關して適当な量を知る」は、節食に心掛けることをいつています。現代は飽食暖衣の時代で、これもほとんど守られていません。大多数の人は、美味しいものをたらふく食べて、太りすぎ、成人病にさえなっています。長生きの秘訣の一つは、節食してカロリーを取りすぎないようにすることです。

次に、「淋しいところにひとり臥し、座し、心に關す

ることにつとめはげむ」ですが、今は、これは大多数の僧侶ですら、していないことだと思えます。

どんな宗教でも同じですが、宗教の究極は、自分を知ること（絶対自己の自覚 即絶対他者の自覚）ですので、自分で実際に自分の中を覗き込まないかぎり、自分の宗教性（靈性）を開発し、自分を知って、安心立命に至ることはできません。そうして、真の自分を知るとき、窓の外を覗かなくても、世界のことがかつたと思えるのです。老子で言えば、「為すこと無くして、為さざること無し（無為而無不為）」という境地に達するので、釈尊で言えば、「天上天下 唯我独尊」です。

こうなるために、「淋しいところにひとり臥し、座し、心に関するることにつとめはげむ」のです。「心に関することにつとめはげむ」とは、もっとも分かりやすい言葉で言いますと、「こころを磨く」ということに当たっています。具体的には、毎日、ヨーガ・瞑想につとめることです。

（一八六）たとえ貨幣の雨を降らすとも、欲望の満
足されることはない。「快樂の味は短くて苦痛であ
る」と知るのが賢者である。

これは、欲望に限りがない、ということを知ることの尊さを教える偈です。

欲望を、私は、大きく三つに分けています。 性欲、

食欲、 優越欲です。

性欲には、生命の延長欲求や子孫の繁栄欲も入っているとします。また、食欲には、様々な物欲も入るとします。

こうした欲望にはきりがありません。例えば、中国の王様のように、美味しいものを世界中から集めさせ、この女と思えば、だれでも側室にし、絶対服従の家来に取り囲まれ、外敵の襲来も無くしたとしても、最後には死にたくないと思えば、死の恐怖から逃れる努力がいつたようです。当然だと思えます。

人間はどんなに栄耀栄華を極めようと、あるいは、極めるほど、それに満足できなくなってくるのです。どこまでも、欲望への執着を強めていくのです。そのことがどんなにはかないことが、太閤秀吉も、辞世の句に「なにわのこともゆめのまたゆめ」と歌っています。あれほど出世した秀吉も、決して満足して死んでいったとは思えません。「快樂の味は短くて苦痛である」ということになるのです。

それに反して、欲望や快樂の追求をできるだけひかえ、足るを知って、この前の偈のとおり、ひたすら修行にはげむとき、すべてに満たされ、一日生きることが永遠の一日であると実感でき、お迎えがあれば、いつでも喜んで死んでいけるようになるのです。

(一八七) 天上の快樂にさえもこころ樂しまない。
正しく覺った人(仏)の弟子は妄想の消滅を樂しむ。

この偈の最初の文の主語も、「正しく覺った人(仏)の弟子」だと思えます。そうしますと、そうして人は、「天上の快樂にさえもこころ樂しまず」「妄想の消滅を樂しむ」ということになります。

少し解説しないと分かりにくいと思えます。一番分からないのは「天上の快樂」だと思えます。

ところで、初期の仏教では、僧侶はニルヴァーナ(解脱)に至ることが目標とされましたが、在家信者では、能力に応じてお布施をし、戒律を守って善を行えば、死後は天に生まれ変わると、されました。

その天がこの天上と考えられます。しかし、この天も、神々の住む楽しい所ではあるのですが、しかし、そ

こでもまだ寿命があつて、再び六道を輪廻しなければなりません。つまり、いずれは、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の六つのどれかに、再び生まれ変わらなければなりません。

ですから、仏弟子である僧侶は、在家が善行を積んで、あの世でめざす天での快樂を求めはしないのです。そうではなくて、仏弟子たるものは、全ての「妄想の消滅を樂しむ」のです。

妄想とは、死後は天に生まれ変わるだろうかとか、いつお迎えが来るだろうかとか、この世であす食べるものはどうなるだろうかとか、自分が死んだら自分の残した財産はどうなるだろうかとか、自分の名は残るだろうか、名声はどうなるだろうかとか、子どもたちや連れ合いなどの家族はどうなるだろうかとか、などと思ひ煩うことです。人間が意識の中ではからうことは、すべて妄想と言えます。いわゆる、精神医学でいう病的に誤った判断や観念を言っているではありません。だれでもが、日常的に思ひ煩うことです。

しかし、そうした意識の中の妄想を消滅することは、意識してできることではありません。意識してしようとするほど、ますます、妄想に取りつかれることになります。消滅するためには、(一八五)で述べていま

したようにして、つとめはげむことが大切なのです。

(一八八) 人々は恐怖にかられて、山々、林、園、樹木、霊樹など多くのものにたよろうとする。

(一八九) しかしこれは安らかなよりどころではない。これは最上のよりどころではない。それらのよりどころによってはあらゆる苦悩から免れる事はできない。

多くの人は、日本でも、自然の山や岩や木を霊が宿るものとしてあがめています。しめ縄を張ったり、お社を作ったりして、お祀りしています。

多くは、人間の力を超えた自然への脅威から、お祀りするようになったものと考えられます。

この偈はそうしたものに頼っても、それが最上の安らぎを与えるものではない、と教えています。勿論、お祈りすることで何がしかの安心は得られますが、それは、人間の魂が救われるようなものではないのです。そうしたものにたよっても、「あらゆる苦悩から免れる事はできない」のです。

それは、仏像を拜んでみても同様です。釈尊の時代には、仏像はありませんでしたので、この偈では仏像は出

てきていませんが、仏像でも同じことなのです。

真に頼れるものは、そうした自分の外部にあるものではないのです。この世で自分の外部にあるものは、人を含めてすべて相対で有限で時間的な存在です。勿論、自分自身も相対です。

しかし、私たち人間は相対ですが、相対者の中では、人間のみが、相対なことを意識することができます。意識して自分の行動や生活をコントロールすることができます。そして、この世の相対なものは、相対なものを超えたものによって存在が贈られていると考えられます。絶対で無限で永遠なものを自分に宿していると考えることができなのです。

そして、考えることができるだけではありません。自分に宿る絶対者(如来)を、ひたすら修行することによって、実感することができるようになれるのです。

その状態を、ニルヴァーナ(解脱、覚り、悟り)と呼びます。でも、それは、実感した人でなければ分かりません。食べたことのない食物の味を教えることができないのと同じです。

一番恐ろしいことは、ニルヴァーナに達していないのに達したと思ひ込んで、自己を肥大化させ、好き勝手なことをすることです。オウム真理教がその好例です。

後記

- 一、新しい年がはじまりました。早々に年賀状を頂いた方に、紙面をお借りしてお礼申し上げます。どなた様にも賀状を遠慮させて頂いています。どうか、失礼をお許しく下さい。
- 二、この『こころのとも』も第八巻がはじまりました。これからも、精進して続けて行きたいと思えます。はじめた頃より、すこし難しくなつたでしょうか。ご感想がありましたら、お寄せください。
- 三、ある養護学校の先生から、年賀状を頂きましたが、その中に、昨年、障害児教育の実情を視察するために、欧米をまわってきました、と書かれていました。そして、訪問した多くの都市で、養護学校がなくなり、ノーマライゼーション・インテグレーションが進んでいることがわかった、とありました。私も、日本でも早く実現されればよいのに、と思つています。
- 四、私は、かつて、大学の研究紀要に「知的障害者に人格の完成はあるか」と題する論文を発表しました。その中で、次のようなことを述べました。
- 五、いま、知的障害児・者は知的能力で差別されているため、彼らを入学させている普通の高等学校（養護学校高等部はあるが）すらがないこと、教育の目的である、

人格の完成は知的障害児・者の方がより可能性が高いと考えられること、そのために彼らの行ける大学や大学院が必要なこと、などです。

六、繰り返しになりますが、欧米のように、ノーマライゼーションが進み、養護学校がなくなつて、全員が地元
の学校で、障害に十分配慮された教育が受けられるようになること、そして、知的障害があつても差別されないで、教育を受ける権利が高等教育まで保障されるようになること、あらためて、を祈りたいと思います。

七、今年が皆様にとりまして、よき年になりますよう、こころからお祈りしております。

（合掌）

月刊 こころのとも 第八巻 一月号 （通巻 八十五号）	平成九年一月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 （ひびきのさと 沙門）中塚 善成 <small>（ひびきのさと）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと と 口座番号 01610 8 38660	

